

モンスタープラント 第3巻

モンスタープラント (monster plant)。怪物植物と称されるこの生き物は、巨大な肉食植物 (イーター)。まるでワニのような大きな口の中には無数の鋭い歯が並んでいる。高さ約4メートルの本体は移動できないが、自在に操れる無数の蔦 (つた) は数メートルもの長さがあるため、その圏内に入った獲物を絡めとってしまえる。

暴れる獲物のアナルに触手を突っ込み、興奮剤溶液を注ぎ込む。性的快感を強制的に与えつづけ絶頂状態にして動けなくしてから貪り喰うモンスターである。



【第17話】

とある研究所。人里から隔離されたこの場所は深い森の中にある。この施設の地下には不思議な空間があった。20メートル四方の広さで高さ5メートルもあるこの部屋の中は、まるでジャングルのよう。

巨大な植物がところせましと生えており、その巨大な幹の隙間を無数の太くて長い蔦が伸びている。真っ暗な中、この巨大植物群がこの部屋に茂っている。今は真夜中。だから暗いというわけでもなく、地下室で灯りをつけていないから仮に今が昼間であっても灯りをつけなければ暗い場所である。

雨。激しい雨が降っている。地上のすべての音をかき消すようなこの雨音は、この地下室では大人しめに響き続けている。その音で隠すかのように、女の喘ぎ声も響いている。

巨大植物たちの部屋をガラス一枚隔てた正面に管理室があり、声はここから聞こえてくる。この部屋は宿直室でもあるようで、2人の少女たちがここで寝そべり、抱き合いな

がらキスしている。

2人は汗だくになりながら、相手の乳房を揉み、股間をまさぐっている。雨の音に隠れるように声を殺しながら殺しきれていない。いけないことをしていると分かっているながら、吐息を混ぜ、唾液を混ぜ、性液すら混ぜて本能に突き動かされていた。

2人の体臭はドアの隙間から、植物が茂る部屋へと流れていた。『彼ら』はその匂いに食欲と性欲をかきたてられていた。美味そうな獲物を捕らえようと、鳶をムチのようにしならせた。それは壁に激しく当たり、バシーン！と音を立てる。

その音にビクッとなって動きを止める少女たち。なぜか彼女たちは体操服を着てブルマを穿いていた。研究施設には似合わない格好をしてはいるが、いたずらで忍び込んだJKではなく、本当に宿直室で当番をしているようである。

音を不審に思った少女たちはドアを開け、植物がある部屋を見渡すも、しかし暗くてよく見えない。一方、『彼ら』の方は少女たちの形がある程度把握できていた。彼らに目はないが、伝わる振動からどこに何があるか感知することができる。さらには植物でありながら嗅覚も持っており、これらがエサであることも分かっていた。

また彼らは根で繋がっていた場合、その個体同士で情報伝達がなされ、意思疎通ができるようになる。彼らはもはや1つの意思を持った『彼』とも呼べる。

少女の1人は暗いなか恐る恐る部屋へと入り、短い階段を降りると土が敷き詰めてある地面（床？）に踏み込む。

特に異常なしとみなし、足下にあった何かを口にした。それは小さなメロンのような果実で、足下にたくさん成っていた。もう1人の少女もまたその果実を手にとり口にする。2人はまた興奮し、自らの乳房を体操服の上から揉み出し、ブルマの上から股間をまさぐり始めた。そのうちブルマもショーツも下ろし、性器をまさぐる。またも喘ぎ声が響き

渡り、熱い吐息や汗とともに雌の匂いを発生させる。

その匂いにさらに食欲と性欲をかきたてられた『彼』の名はモンスタープラント。専門家の間ではイーターと総称される人喰いモンスターの一種であった。イーターは突如、自慰行為に夢中になり周りが見えなくなっている獲物へと襲いかかる！

何本もの蔦が雌肉の身体に巻きつき捕える。少女たちは驚き身体に巻きついた蔦を振りほどこうともがくも、なかなか外れない。意思を持っているかのように蔦はどんどん少女の身体へと巻きついていき、動きを封じていく。

さらには捕らえた獲物を逃すまいと、少女たちの身体を空中へと持ち上げていく。地面から足が離れた少女たちは、空中でバタバタともがく。すべては真っ暗な中行われているので、彼女たちは何が起きているのか、何をされているのか理解できず混乱する。闇の中、美味そうな雌肉たちを宙吊りのまま自分の方へ運んでいくイーター。

そして闇の中、食肉植物は巨大な口を開ける。まるでワニのような巨大な口の中には、無数の鋭い歯が並んでいた。真っ暗な中、そのおぞましい姿は少女たちからは見えておらず、ただただ宙吊りのままもがき続ける。

このワニのような大きな口で食事が始まる・・・と思いきや、イーターとしてはまだ、この暴れる獲物を食べるには元気過ぎるのか、まだ食べない。イーターはご馳走を前に食欲とともに、性欲が激しく湧き上がってくる。そしてワニのような口から、舌のような赤い触手を伸ばしていくとその先端を、露わになった少女のアナルに一気にぶち込んだ。

「はぁっ、・・・」

という悲鳴とも言えない声がもれる。舌のような赤い触手は、少女の尻穴の奥へと潜り込む。この触手はイーターの舌であるとともに性器とも言えるほど性感帯のかたまりであった。雌肉の内部に入れてだけでも快感を感じる。そして先端から大量の性的興奮剤溶液を噴出する。

「はっつあああああっつ、、、」

言葉にならない声を上げながら、直腸の中に大量の液体がぶちまけられたのを感じる少女。その直後、少女は一気に絶頂を迎えた。電気ショックを受けたかのように、彼女の肉体は一瞬硬直。そして痙攣（けいれん）。

絶頂は収まらず、少女のアナルへと挿し込まれた触手からはなおもドクンドクンと興奮剤が流し込まれる。そのたびに少女の身体はエクスタシーに突き上げられ、快楽に占領される。もはや少女は自分の意思で自分の身体を動かさない。

少女の尻穴からは溢れ出た興奮剤溶液が垂れ流されていく。そして性器からは性液が垂れ流しとなり、失禁し尿も垂れ流されていく。

この行為はイーターからしてみれば射精のような快感が得られる。興奮剤溶液を出せば出すほど絶頂を得られる。いわば強姦のような行為でもあるのだ。強姦でもあり、毒ヘビが獲物に毒を注入して弱らせる行為でもある。

イーターは2匹目の雌肉にも同様のことを行う。強制的なオーガズムは長時間に及んだ。少女たちのアナルへと注がれ続ける興奮剤は、彼女の身体をエクスタシーの世界から逃がさない。快楽に占領された少女の肉体は、もはや自分の意思で動かすことは出来ない。汗まみれになりながら悶え続ける。

闇の中、少女たちは天国のような地獄のような無限とも思える時間を強制され、彼女たちの喘ぎ声は雨音にかき消されていった。

30分後、少女たちはぐったりと脱力し、もはや動くことすら出来なくなっていた。放心状態で視線も定まらない。全身から汗を流し、顔からは涙と鼻水とヨダレを垂れ流し、股間からは性液と尿を垂れ流した無様な姿をさらしていた。人としての尊厳も、女性としての尊厳も奪われ、もはやただの食肉であった。

一方イーターの方は心地良い余韻に浸っていた。少女たちを強姦し30分間も射精し続けた後のような心地良さ。性欲をともなった食肉加工も済み、いよいよ食事である。

イーターは蔦を使い、器用にこの雌肉たちから衣服を剥ぎ取っていく。汗まみれになった体操服もブルマも、太ももに引っかかったままのブルマもショーツも、されるがままに脱がされ裸にされた雌肉のアナルには、まだ舌のような触手が挿し込まれたまま。イーターはその触手を口の中へと戻していく。

それに伴って雌肉も尻を突き出す形で捕食者の口へと運ばれていく。そして獲物の尻肉に喰らいつくと、無数の鋭い歯が柔らかい尻肉に突き刺さる。そして丸裸の雌肉を尻から呑み込んでいく。その間も雌肉は抵抗する力は残っておらず、されるがまま捕食者の口の中へと消えていった。

★つづきは本編にて★